

国際アーサー王学会日本支部会報

Société Internationale Arthurienne Section Japonaise

目次	
I. 2010 年度年次大会報告	1
年次大会プログラム	1
総会議事録	1
大会発表要旨	3
II. 文献情報	5
独文学	5
仏文学	6
英文学	9
III. 2011 年度年次大会のお知らせ	10
IV. 会計からのお願い	10
V. 会員名簿に関するお願い	10
VI. 研究発表・シンポジウム企画募集	11

I. 2010 年度年次大会報告

日本支部の 2010 年度年次大会は、下記の通り滞りなく開催されました。ご参加いただいた皆様に厚く御礼申し上げます。

[日時] 2010 年 12 月 18 日 (土) 午後 1 時より

[場所] 慶應義塾大学三田キャンパス
西校舎 524 番教室

[大会費] 1,000 円 (学生無料)

[懇親会費] 5,000 円 (学生 4,000 円)

年次大会プログラム

開会 (13:00)

開会の辞 会長 高宮 利行 (慶應義塾大学)

第一部 研究発表 (13:05~14:15)

(司会) 高橋 勇

①「ペルスヴァルの聖体拝領——クレチアン・ド・トロワにおける死と復活の表彰について」

(発表者) 小沼義雄 (仏・レンヌ大学 (院))

②「中高ドイツ語の叙事詩における節食について」

(発表者) 渡邊 徳明 (独・日本大学)

③「19—20 世紀初頭におけるマロリーの『アーサー王の死』——アーサー誕生にまつわるマーリンの役割の変容」

(発表者) 田中ちよ子

(英・サセックス大学 (院))

第二部 情報交換フォーラム (14:45~15:15)

第三部 講演 (15:30~16:30)

「物語実作者から見たアーサー王物語の構成」

(講師) ひかわ 玲子 (作家)

(司会) 高宮 利行

支部総会 (16:45~)

(議長) 会長 高宮 利行

懇親会 (17:30~)

(場所) ポルコロツ 田町慶応通店

2010 年度大会でもまた、会員・非会員の皆さまに多数ご参加いただくことができました。多くの方々よりいただいたあたたかいサポートに心より御礼申し上げます。お茶や菓子などの差し入れを下さった皆さまにも感謝致したく存じます。また受付業務は昨年度に引き続き慶應義塾大学の学生さんにご協力いただきましたことをここに記し、感謝の意を表します。懇親会も、盛会のうちに終了することができました。ご参加・ご協力いただいた皆さま、ありがとうございました。
(事務局)

総会議事録

報告事項

①2010 年度の活動について

Bibliographical Bulletin の発行が遅れたことによる送付遅延について報告があった。これにともない会報・名簿・*Bulletin* はまず大会参加会員に現地で配布され、欠席者には後日郵送することとされた。

③幹事 (書誌) からのお願い／報告

Bulletin とニューズレターに掲載される書誌の編集方針の違いについて改めて説明があった。前者はアーサー王伝説もしくは中世文学に関連する会員業績に限り、後者は会員のその他業績および広くアーサー王伝説関連の出版物を掲載する。

また **Bulletin** に掲載される梗概の長さの上限が 50 語と大幅に縮減されたので、寄稿者に注意を呼びかけた。

特に **Bulletin** への掲載に当たっては書籍・論文を実際に手にして検討しなくてはならないため、経済的負担や時間的制約を考慮し、できるかぎり執筆者本人から書誌担当者に献本や抜き刷り送付をお願いしたい旨が強調された。

④退会希望者報告

沓掛 良彦

⑤ブリストル大会参加者について

2011 年夏にブリストルで開催される国際大会への日本支部参加者について報告があった。

不破 有理

河崎 征俊

小沼 義雄

松井 倫子

佐佐木 茂美

高木 眞佐子

高宮 利行 (名簿順)

協議事項

①2009 年度会計報告の訂正について

先年度の総会にて承認された会計報告に誤りがあることが幹事 (会計) より報告され、訂正につき承認された (訂正後の報告書は **Newsletter23** 号に掲載済)。

②2010 年度会計報告

幹事 (会計) より 2010 年度の会計収支決算報告が報告され会員の承認を受けた。またその際、過去より持ち越された書類上と現金残高の間の差額を「調整金」の形で組み入れることが承認された。

〈収入〉

項目	金額
大会費	37,000
展示料	20,000
懇親会会費	158,000
会費 (他年度含む)	211,500
入会金	9,000
寄付金	9,000
利子	335
学会誌バックナンバー売上	2,000
調整金	1,984
小計	448,819
前年度繰越金	153,813
計	602,632

〈支出〉

項目	金額
懇親会費用	150,000
大会アルバイト料	10,000
本部への学会誌支払	*0
郵便局振込手数料	**0
事務・雑費・郵便費	37,335
学会誌配布費	34,500
大会会場費	8,190
小計	240,025
翌年度繰越金	362,607
計	602,607

*/** 上記報告事項①にある *The Bibliographical Bulletin* の発行遅延により、料金の請求も現時点では届いていないため、次年度の予算より支出することとなった。下記 2011 年度予算参照。

続いて 2011 年度予算が報告され会員の承認を受けた。

〈収入〉

項目	金額
懇親会会費	200,000
大会費	35,000
会費	200,000
入会金	9,000
展示料	20,000
小計	464,000
前年度繰越金	362,607
計	826,607

〈支出〉

項目	金額
懇親会費用	200,000
大会経費・アルバイト料	10,000
本部への学会誌支払	400,000
銀行手数料	5,000
事務・雑費・郵便費	25,000
学会誌配布費	35,000
会場費	10,000
小計	685,000
翌年度繰越金	141,607
計	826,607

③入会希望者の報告・承認

小栗栖 等 (和歌山大学)

(推薦・篠田勝英／岡田真知夫)

竹田 千穂 (早稲田大学 (院))

(推薦・篠田勝英／瀬戸直彦)

松井 倫子 (ブリストル大学 (院))

(推薦・高宮利行／不破有理)

大会発表要旨

①「ペルスヴァルの聖体拝領——クレチアン・ド・トロワにおける死と復活の表彰について」

小沼 義雄

クレチアン・ド・トロワの『聖杯物語』は二人の騎士の冒険がそれぞれ複雑に絡み合う二つの物語から構成されている。前半部はペルスヴァルの人格的成長を軸として、漁夫王の傷の治癒、その領土・領民の救済という主題を扱っている。他方、後半部はもっぱらゴーヴァンの冒険を取り扱うが、ペルスヴァルが最後に登場する僅か 300 行余りの「聖金曜日の挿話」が長大なゴーヴァン物語の合間に挿入されるという構成上の問題を孕んでおり、一見すると、この小挿話が『聖杯物語』全体の直線的な展開を妨げているような印象を与えている。聖金曜日から復活祭までの三日間、隠者の庵において、ペルスヴァルは罪の告白をし、隠者によって聖杯、漁夫王、ペルスヴァルの家系といった数々の謎について解き明かされる。そして復活祭に聖体を拝領し、キリストの死の意義を理解した後、もはやペルスヴァルは作品に姿を現さない。

聖金曜日の挿話の存在意義をめぐり、これま

で様々な仮説が提起されてきたものの、研究者の議論はつねに堂々巡りで、未だに統一の見解らしきものは確立されていない。しかし作品構造をめぐる問題は脇に置くとして、聖金曜日の挿話における作者の意図は明かであろう。キリストの死と復活を追体験することにより、ペルスヴァルが精神面での復活を果たし、その救世的使命を全うする存在となるからである。作品冒頭からキリストの磔刑の意義が強調され、主人公が礼拝に足繁く通う必要性が強調されていた。実際に、ペルスヴァルは《聖金曜日》に隠者の庵を訪れ、《復活祭》に聖体を拝領し、救世主と同一化するのである。

『エレックとエニード』から『獅子を連れた騎士』に至るまで、「死」に対する「生」の寓意的な勝利、主人公の「復活」という形での生命賛歌は全クレチアン作品に共通する基本理念であった。エレック、フェニス、ランスロ、イヴァンといった主人公たちが「死」を克服することによって《至純の愛》を体現するという理念が繰り返し描かれていた。聖金曜日におけるペルスヴァルの聖体拝領はクレチアンに特有の復活思想の延長線上に位置づけられるべき小挿話であり、ペルスヴァルの人格的成長はキリストの神秘的生涯と重ね合わせて描かれている。

②「中高ドイツ語の叙事詩における節食について」

渡邊 徳明

12, 13 世紀ドイツの宮廷風叙事詩においては、ヨアヒム・ブムケが著書『中世の騎士文化』の中で指摘するように、宮廷的な作法を身に付けた騎士が節食する事例が見られる。ブムケはハルトマンの『エーレク』において主人公が決闘の前に行う節食を例に挙げている。しかしこのエーレクの態度については、世俗的な宮廷の規範を意識した、という以前に、キリスト教徒としての敬虔さから、大食を慎んで身を律したものととも理解できる。

逆に、節食的態度が守られておらず、登場人物が飲食への欲求をむき出しにしていながら、そのことがホスト側に許容されている場合もある。『パルチヴァール』において未熟な主人公が見せた無作法な食事の仕方が、やがて彼の師

となるグルネマンツによって許容されているエピソードもその一例である。これに関しては、単に形式的な宮廷の規範の遵守よりも、もっと本質的な意味での良き人間としての資質が期待されていると考えられる。聖杯城における「問いの怠り」のエピソードとの関連も見逃せまい。

また飢餓状態の中、神の奇蹟によって食糧が確保され、あるいは絶食状態でも生きられたというエピソードも散見される。ハルトマンの『グレゴリウス』では、主人公が海上の岩に17年間も食を絶って過ごす。通常不可能であるはずの、栄養摂取無しでの長期間の生存を可能にしているのは、神の奇蹟のおかげであるとして説明されている。

ある意味でこういった神の奇蹟のエピソードと形式的に類似するのが、ゴットフリートの『トリスタン』に描かれた「愛の洞窟」での「食の奇蹟」(Speisewunder)のエピソードである。二人の恋人は「愛の洞窟」で何も食べないが、このような二人の絶食を「宮廷的」と説明するブムケの指摘は妥当だろうか。ここでは、神への信仰と比肩しうるほどの崇高さを認められる愛の力によって、「食の奇蹟」がもたらされるのであり、二人が絶食しながら生きることができるのは愛の奇蹟の賜物とする理解も可能であろう。

③「19—20 世紀初頭におけるマロリーの『アーサー王の死』——アーサー誕生にまつわるマーリンの役割の変容」 田中 ちよ子

19—20 世紀初期に再版されたトマス・マロリーの「アーサー王の死」は、騎士道精神の教書ともてはやされる一方、不道德と思われる箇所は削除・変更された。マーリンの助力により、ユーザー王が人妻イグレーヌを手に入れ、アーサーの誕生に到る経緯は、その筆頭箇所である。改竄は登場人物の描き方にも及び、どこかつかみどころのないマロリーの魔法使いも、現代版では宮廷の重鎮、若き騎士を導く崇高な老賢者として描かれている。

アーサー王誕生エピソードで最も多い改竄は、物語の始まりをユーザーとイグレーヌの結婚、またはアーサー誕生の場面にすることである。

これで、マーリンの人格は大いに高まることになった。まず、貞淑な女性を犠牲にして王の望みを叶え、生まれてくる赤ん坊を報酬に受け取るなど、邪な取引を交わすキャラクターであることから解放される。すると、このエピソードでマーリンに残される役割はアーサーの保護者であることだ。さらによくある改竄が、マロリーでは助言を求められ召喚されても素直に姿を見せない気まぐれなマーリンが、自発的に姿を現す、または宮廷諮問として城に居を構えている様子であることだ。自ら王を訪ねるマーリンは取引など持ち出さず、王と王子のため、ひいては国のためと全面的なアーサーの保護者の役を無報酬で買って出る。まだ幼いアーサーを親元から引き離す際も、陰謀渦巻く宮廷から未来の王を守るためと目的を明らかにし、善意の行為であることに疑いがない。

結論として、現代版マーリンはアーサー王誕生の立役者という重要な役割は失ったが、人格的にはより崇高に改められ、アーサーの保護者としての役目がより強調されるようになったといえよう。

講演「物語実作者から見たアーサー王物語の構成」 ひかわ 玲子

今年度の支部大会では、日本のファンタジー小説の分野をその萌芽期から牽引してきた一人であり、2006 年にはアーサー王伝説を題材とした「アーサー王宮廷物語」三部作を上梓された作家ひかわ玲子氏に、実作者の立場からマロリーの「物語作家」としての特徴についてお話しいただいた。小説として物語を構成するためには、時間や空間、人物描写の整合性が重要であるが、マロリーの作品では特に前半部において、時間経過の整合性がほとんど重視されていないという。これは例えばアーサー王やランスロットの年齢が、作品内では一向に明確にならない点などに現れているのだが、その一方、マロリーの人物造形には一貫性があり、彼の作劇に対する姿勢の特徴がここに読み取れるとのことであった。しかし特筆すべきことに、物語の後半部、特に最後の戦いに際しては時間経過が明快に描写されていることも実例を挙げてお示

しいた。伝説を基盤とし、中世人の観点から描かれている物語を、現代の小説家の立場から読み解くことで、彼我の特徴がともに明らかになっていくという、大変スリリングなひと時を参加者一同堪能することができた。(事務局)

II. 文献情報

独文学

(書誌担当：渡邊徳明)

〈著書(論集・論文集・その他)〉

- 岩波 敦子 「名誉の喪失と回復 中世ヨーロッパの法文化から」 『名誉の原理』(国際書院, 王雲海編) (2010年5月) 13-36頁
- 浜野明大 Ein Beispiel geistlicher Bearbeitung in der frühmittelhochdeutschen 'Genesis' um 1200 - Im Hinblick auf den Unterschied der geistlichen Einstellung zwischen der Wiener Handschrift und der Millstätter Handschrift - Studienreihe der Japanischen Gesellschaft für Germanistik 77 (SrJGG) (Hrsg.v. Akihiro Hamano)(2011年10月)
- 横山由広 Zu 'Erec' v. 6125. Ein Plädoyer für Haupts Konjektur. In: Mittelhochdeutsch. Beiträge zur Überlieferung, Sprache und Literatur. Festschrift für Kurt Gärtner zum 75. Geburtstag. Hg. v. Ralf Plate und Martin Schubert zusammen mit Michael Embach, Martin Przybilski und Michael Trauth. Berlin / Boston 2011, S.42-54 (2011年6月)

〈論文(紀要論文等)〉

- 石川栄作 Siegfrieds Mord im Nibelungenlied und Kiyomoris Tod in der Heike-Geschichte 徳島大学総合科学部『言語文化研究』第18巻 (2010年12月) 75-88頁
- 會田素子 白鳥伝説とグラール伝説—中世ヨーロッパにおける二つの異界 慶應義塾大学日吉紀要ドイツ語学・文学 第47号 (2011年3月) 73-97頁
- 伊藤亮平 Reinmar der Alte の「使者の歌」における使者の役割について: 日本独文学会 中国四国支部『ドイツ文学論集』第44号 (2011年10月) 5-18頁
- 加藤耕義・内藤淳志・草本晶・高瀬誠・平井敏雄 ルッツ・レーリッヒ著『中世後期の物語と、現代に至る文学および民間伝承へのその影響』研究3 学習院大学外国語教育研究センター『言語文化社会』第9号 (2011年3月) 89-113頁
- 寺田龍男 Der Wortschatz bei >Virginal< — Version(V₁₀), (V₁₁) und (V₁₂) — Teil 1: Kriegerbezeichnungen (『ヴィルギナル』の語彙—主要三系統 V₁₀・V₁₁・V₁₂ の比較研究— (1) 「戦士」を表す語彙) 北海道大学「独語独文学研究年報」第36号 (2010年3月) 62-79頁
- 寺田龍男 Der Wortschatz bei >Virginal< — Version(V₁₀), (V₁₁) und (V₁₂) — Teil 2: Heiden und außer- sowie übernatürliche Wesen (『ヴィルギナル』の語彙—主要三系統 V₁₀・V₁₁・V₁₂ の比較研究— (2)異教徒・巨人・竜・侏儒について) 北海道大学「メディア・コミュニケーション研究」第58号 (2010年5月) 137-152頁
- 寺田龍男 Der Wortschatz bei >Virginal< — Version(V₁₀), (V₁₁) und (V₁₂) — Teil 3: Topoi (『ヴィルギナル』の語彙—主要三系統 V₁₀・V₁₁・V₁₂ の比較研究— (3)トポスについて) 北海道大学「メディア・コミュニケーション研究」第59号 (2010年11月) 77-94頁
- 浜野明大 初期中高ドイツ語版『創世記』のミルシュテット写本の改作技法 II — 詩行 1051 から 1367 までの「カインとアベル」のテキスト分析 — 日本大学文理学部『ドイツ文学論集』第31号 (2010年3月)、93-112頁
- 浜野明大 初期中高ドイツ語版『創世記』のミルシュテット写本の改作技法 III — 詩行 1368 か

ら 1573 までの「ノア」のテキスト分析 — 上智大学ドイツ文学会『ドイツ文学論集』 第 47 号 (2010 年 12 月) 9-36 頁

林邦彦 「獅子の騎士」物語の平板化の過程 —Ulrich Füetrer の Iban と Stockholm46 紙写本版 Ívens saga— 『尚美学園大学総合政策研究紀要』 第 19 号 (2010 年 9 月) 51-66 頁

山本潤 『ニーベルンゲンの歌』の重層構造 —シーフリト像を中心に— 東京大学大学院人文社会科学系研究科ドイツ語・ドイツ文学研究会『詩・言語』 第 72 号 (2010) 1-21 頁

山本潤 『哀歌』の『ニーベルンゲンの歌』に対する注釈的機能 —triuwe と übermuot を巡って— 東京大学大学院人文社会科学系研究科ドイツ語・ドイツ文学研究会『詩・言語』 第 73 号 (2010) 1-38 頁

渡邊徳明 ドイツ中世の宮廷風叙事詩における節食・絶食について 桜門ドイツ文学会『リュンコイス』 44 号 (2011 年 3 月) 1-17 頁

渡邊徳明 美しくあること—『ニーベルンゲンの歌』のクリエムヒルト像をめぐる一考察 慶大文学部高橋勇研究会 The Round Table 第 25 号 (2011 年 3 月) 1-18 頁

〈翻訳〉

林邦彦 『王冠』(その二) ハインリヒ・フォン・デム・テュールリーン作 『Angelus Novus』 第 38 号、早稲田大学大学院文学研究科ドイツ語ドイツ文学コース Angelus Novus 会 (2011 年 3 月) 59-88 頁

林邦彦 『イーヴェンのサガ』—Stockholm46 紙写本版— 『アイスランドの言語、神話、歴史 — 日本アイスランド学会 30 周年記念論文集—』清水 誠(編)、麻生出版 (2011 年 4 月) 43-85 頁

仏文学

(書誌担当: 小沼義雄)

I 〈中世フランス文学作品〉

(1) ファクシミリ版

Guillaume de Lorris et Jean de Meun, *Le Roman de la Rose MS 2*, under the Direction of Tomonori MATSUSHITA, Introduction by Sylvia HUOT, Introduction in Japanese by Katsuhide SHINODA, Senshu University Press, 2010 « Senshu University Western Manuscripts in Facsimile, Vol. II ».

—, *Le Roman de la Rose MS 3*, under the Direction of Tomonori MATSUSHITA, Introduction by Sylvia HUOT, Introduction in Japanese by Katsuhide SHINODA, Senshu University Press, 2010 « Senshu University Western Manuscripts in Facsimile, Vol. III ».

※ 専修大学所蔵の『薔薇物語』写本のファクシミリ版。

(2) 翻訳

「アイメリック・デ・ペギヤンの哀悼歌」(高名康文訳)、『福岡大学人文論叢』、42 卷 3 号、2010 年、pp.843-857.

※ アイメリック・デ・ペギヤンによる哀悼歌(planh)四編の翻訳。

クードレット『西洋中世奇譚集成 妖精メリュージュ物語』(松村剛訳)、講談社、2010 年(講談社学術文庫)。

※ 文庫による再版。

『フラメンカ物語』(中内克昌訳)、九州大学出版会、2011 年。

しま・はるを(小柳保義)編訳『ふらんす恋愛詩集 花車』、文芸社、2011 年。

※ ジャウフレ・リュデルからシャルル・ドルレアンまで、六名の中世詩人の叙情詩を含む。

II 〈研究(単行本)〉

青谷秀紀『記憶のなかのベルギー中世』、京都大学出版会、2011 年。

伊藤毅編『バステードーフランス中世新都市と建築—』、中央公論美術出版、2009 年。

慶應義塾大学文学部フランス文学研究室編『フランス文学をひらく—テーマ・技法・制度—』、慶應義塾大学出版会、2010年。

小辻梅子、山内淳編『二つのケルト—その個別性と普遍性—』、世界思想社、2011年（世界思想ゼミナール）。

三光寺由実子『中世フランス会計史』、同文館出版、2011年。

高橋薫『改革派詩人が見たフランス宗教戦争—アグリッパ・ドービニェの生涯と詩作—』、中央大学出版部、2011年（125ライブラリー）。

轟木広太郎『戦うことと裁くこと—中世フランスの紛争・権力・真理—』、昭和堂、2011年。

原野昇、水田英実、山代宏道、中尾佳行、地村彰之『中世ヨーロッパの祝宴』、溪水社、2010年。

樋口淳『民話の森の歩き方』、春風社、2011年。

—『フランスをつくった王—シャルル7世年代記—』、悠書館、2011年。

宮下志朗『神をも騙す—中世・ルネサンスの笑いとは嘲笑文学—』、岩波書店、2011年。

横山安由美、朝比奈美知子編『フランス文化55のキーワード』、ミネルヴァ書房、2011年（世界文化シリーズ）。

Ⅲ〈研究(雑誌・紀要論文等)〉

伊藤了子「前置詞の後の **tant** と **ce**—『散文トリスタン物語』の場合—」、『人文論究』（関西学院大学人文学会）、60巻3号、2010年、pp.51-74。

上杉恭子「賽を握る女—ブランジアン雄弁と沈黙—」、『関東支部論集』（日本フランス語フランス文学会）、19号、2010年、pp.129-142。

植田裕志「恋愛についてどのように語るか—クレチャン・ド・トロワ『クリジェス』—」、『名古屋大学文学部研究論集』（文学）、57号、2011年、pp.47-68。

—「ロオの死：『ペルレスヴォー』における編み合わせの手法について」、『名古屋大学文学部研究論集』（文学）、55号、2009年、pp.69-95。

上山益己「中世盛期北フランスの“聖なる”諸侯—諸侯家系の聖性をめぐる戦略—」、『西洋史学』、237号、2010年、pp.1-19。

小川直之「《白鳥の騎士》と十字軍：中世フランスにおける十字軍系列叙事詩の成立について」、『亜細亜大学学術文化紀要』（柿山隆教授退職記念号）、18号、2010年、pp.7-33。

一、松本賢信、三浦俊彦「第6回総合学術文化学会学術研究会の報告」（「中世フランス語の写本は何を語るだろうか？」「文学とチェスと戦争」「原爆投下をめぐる天佑論、天災論、天命論」）、『亜細亜大学学術文化紀要』、17号、2010年、pp.139-150。

小栗栖等「**Scriptorium** による電子校訂法」、『和歌山大学教育学部紀要（人文科学）』、61号、2011年、pp.79-95。

OGURISU Hitoshi, “Un supplément au glossaire de *CourLouisLe*”, *Zeitschrift für Romanische Philologie*, Band 127, Heft 3, 2011, De Gruyter, pp.411-421.

片山幹生「十三世紀演劇テキストの流動性—初期フランス語演劇作品と語りものジャンル—」、『西洋比較演劇研究』（日本演劇学会分科会西洋比較演劇研究会）、10号、2011年、pp.45-58。

川口順二「文学とフランス語の歴史」、慶應義塾大学文学部フランス文学研究室編『フランス文学をひらく—テーマ・技法・制度—』、慶應義塾大学出版会、2010年、pp.177-190。

杳掛良彦「エラスムスとギヨーム・ビュデー—奇妙な友情またはユマニストによる **ARENA** での闘い—」、『アリーナ』（中部大学総合学術研究院）、8号、2010年、pp.76-88。

久保田勝一「『七学芸の結婚』について—中世フランスの学問と美德—」、『仏語仏文学研究』（中央大学仏語仏文学研究会）、42号、2010年、pp.35-52。

黒岩卓「『我らが主の受難の聖史劇』（サント=ジュヌヴィエーヴ図書館所蔵写本 1131 収録）の孤立詩行の評価について」、『Nord-est』（日本フランス語フランス文学会東北支部会）、3・4号、2011年、pp.70-83。

—「聖王の言葉の再編成—『聖ルイ殿の生涯』における韻文構築原理に関する覚書—」、藤巻和宏編

『聖地と聖人の東西—起源はいかに語られるか—』、勉誠出版、2011年、pp.235-253.

KUROIWA Taku, “« Le viel jeu » en mouvement : la configuration rimique et métrique des triolets dans les manuscrits du *Mystère de la Passion* d’Arnoul Gréban”, *Vers une poétique du discours dramatique au Moyen Âge*, Paris, Champion, 2011 « Collection Babeliana.14 », pp.143-157.

KUROIWA Taku, Xavier LEROUX, Darwin SMITH, “De l’oral à l’oral : réflexions sur la transmission écrite des textes dramatiques au Moyen Âge”, *Médiévales*, 59, 2010, pp.17-40.

—, “Ipotesi sul funzionamento della versificazione nella *Passion de saint André*”, *Teatro religioso e comunità alpine, Atti del Congresso internazionale, Susa – Convento di San Francesco, 14-16 ottobre 2010*, Caterina AGUS, Giuliana GIAI et Andrea ZONATO (dir.), Susa, Centro culturale diocesano di Susa et Università degli studi di Torino, 2011, pp.182-194.

—, “Formes fixes : futilités versificatoires ou système de pensée ?”, *Vers une poétique du discours dramatique au Moyen Âge*, Paris, Champion, 2011 « Collection Babeliana.14 », pp.3-25.

KONUMA Yoshio, “La résurrection de Gréoréas : le scénario comique dans *Le Conte du Graal* de Chrétien de Troyes”, *Etudes de Langue et Littérature Françaises*, Société Japonaise de Langue et Littérature Françaises, t.99, 2011, pp.3-21.

瀬戸直彦「マルカブリユの「椋鳥の歌」2部作について」、『早稲田大学大学院文学研究科紀要』、第2分冊、56号、2010年、pp.43-60.

—「ギョーム九世つれづれ」、『流域』、68号、2011年、pp.14-26.

竹田千穂「ジャン・フロワサールの『年代記』第三巻「ベアルンの旅」における禁忌の物語」、『エクフラシス』(早稲田大学ヨーロッパ中世・ルネサンス研究所)、1号、2011年、pp.109-123.

—「ジャン・フロワサールの『年代記』第三巻「ベアルンの旅」における語り—フォワ伯の子殺しについて—」、『早稲田大学大学院文学研究科紀要』、第2分冊、56号、2010年、pp.131-147.

傳田久仁子「「境界」としてのリュジニャン城：『メリュジーヌ物語』における空間」、『研究論集』(関西外国語大学)、91号、2010年、pp.57-72.

—「子供のいないカップルたち：『悪魔のロベール』における不妊」、『研究論集』(関西外国語大学)、93号、2011年、pp.41-59.

中里まき子「ジャンヌ・ダルク処刑裁判と文学作品—少女の「裏切られた遺言」—」、『アルテスリベラレス』(岩手大学人文社会学部)、85号、2009年、pp.69-88.

原野昇「フランス中世文学にみる祝宴—作品中における祝宴場面の果たす役割—」、原野昇、水田英実、山代宏道、中尾佳行、地村彰之『中世ヨーロッパの祝宴』、溪水社、2010年、pp.82-115.

春木仁孝「中世における時間の表わし方—古期フランス語に見る時制の用法—」、『Gallia』(50号記念特集：時の経過、大阪大学フランス語フランス文学会)、50号、2010年、pp.75-84.

福本直之「『狐物語』後代作品の研究—フィリップ・ド・ノヴァール『回想録』の場合—」、『創価大学一般教育部論集』、34号、2010年、pp.19-73.

—「或る中世写本の歷程」、『創価大学一般教育部論集』、35号、2011年、pp.1-28.

FUKUMOTO Naoyuki, “Tradition manuscrite du *Roman de Renart* : Branche VIII, *Pèlerinage de Renart*”, 『創価大学一般教育部論集』、35号、2011年、pp.29-86.

MATSUMURA Takeshi, “Sur *Guerin le Loherain* de David Aubert. Quelques remarques lexicographiques”, *Le Souffle épique. L’Esprit de la chanson de geste. Etudes en l’honneur de Bernard Guidot*, textes réunis par Sylvie BAZIN-TACCHELLA, Damien DE CARNE et Muriel OTT, Dijon, Editions Universitaires de Dijon, 2011, pp.361-364.

三木賀雄「『散文トリスタン物語』における海事表現について」、『神戸大学国際コミュニケーションセンター論集』、7号、2010年、pp.15-24.

吉田敦彦「アーサー王伝説に見られるスキュタイ神話との顕著な類似性」、井本英一編『東西交渉とイラン文化』(アジア遊学137)、勉誠出版、2010年、pp.36-41.

渡邊浩司「古フランス語散文<アーサー王物語>の<サイクル化>—プレイヤッド版『聖杯の書』所収『アーサー王の最初の武勲』を手がかりに—」、佐藤清編著『フランス—経済・社会・文化の諸相—』、中央大学出版部、2010年、pp.93-132.

IV<研究書・研究論文の日本語訳>

- ヴァルテール（フィリップ）「世界終末のしるし」としての「太陽の死」（渡邊浩司訳）、『仏語仏文学研究』（中央大学仏語仏文学研究会）、43号、2011年、pp.161-177.
- 「シャルルマーニュの近親相姦とロランの誕生」（渡邊浩司訳）、『愛の二元性（比較神話学シンポジウム原稿集）』（比較神話学研究組織 GRMC）、名古屋市市政資料館、2010年、pp.137-141.
- 『聖ブランダン航海』（12世紀）が描くユダの劫罰—インド=ヨーロッパ起源のモチーフ<輪廻の車輪>をめぐって」（渡邊浩司訳）、『世界神話の罪と罰（比較神話学シンポジウム原稿集）』（比較神話学研究組織 GRMC）、大阪大学、2011年、pp.55-59.
- ネジャット（ハミッド）『ヴィースとラーミン』伝説からみたペルシアの神話的恋愛と抒情詩（渡邊浩司訳）、『愛の二元性（比較神話学シンポジウム原稿集）』（比較神話学研究組織 GRMC）、名古屋市市政資料館、2010年、pp.146-153.

V<書評>

- 細川哲士「アントニーヌ・マイエ『荷車のペラジー』（大矢タカヤス訳）、彩流社、2010年」、『cahier』（日本フランス語フランス文学会）、8号、septembre, 2011年、pp.21-22.
- 「伝説とその運命—『西洋中世奇譚集成 妖精メリュージュ物語』（松村剛訳）、講談社学術文庫、2010年—、『流域』、68号、2011年、pp.22-26.
- 宮下志朗「マイケル・A・スクリーチ『ラブレー：笑いと叡知のルネサンス』（平野隆史訳）、白水社、2009年」、『cahier』（日本フランス語フランス文学会）、7号、mars, 2011年、pp.39-40.
- 渡邊浩司「Dating *Peredur*: New Light on Old Problems」（ナタリア・ペトロフスカイヤ）、『Cylchlythyr』（日本カムリ学会）、25号、2011年、pp.2-7.

英文学

（書誌担当：西川正二）

<翻訳>

- ドナヒュー、ダニエル『貴婦人ゴディヴァー語り継がれる伝説』（伊藤盡訳）、慶應義塾大学出版会、2011年

<研究（雑誌・論文集等）>

- 池上忠弘「チョーサーの笑い話—『粉屋の話』を巡って（その5）」『ことばの不変と変容』（Anglo-Saxon語の継承と変容叢書5）専修大学大学院社会知性開発センター、2010; 43-48.
- 海野 昭史、西 善也「マロリーの *Morte Darthur* 研究 —聖ミカエル山の巨人退治(1)—」『朝日大学一般教育紀要』（35）(2010), 33-44
- 多ヶ谷有子「*Sir Gawain and the Green Knight*における修辭的詩形の意味と役割」『関東学院大学文学部2010年度紀要』（第120・121号合併号 上巻）(2010), 73-107
- Tagaya, Yuko. "Far Eastern Island and Their Myth: Japan", in *Islands and Cities in Medieval Myth, Literature and History: Papers Delivered at the International Medieval Congress, University of Leeds, in 2005, 2006 and 2007* (Beihefte zur Mediaevistik - Volume 14) edited by Andrea Grafetstätter, Sieglinde Hartmann and James Ogier (Peter Lang, 2011), 91-111.
- Tagaya, Yuko. "Kyoto in Myth and Literature", in *Islands and Cities in Medieval Myth, Literature and History*, 113-140.
- 高木 眞佐子 "Research note (2/4) Study on the prose Brut MSS in relation to William Caxton's *Chronicles of England* (1480)" 『杏林大学外国語学部紀要』 23 (2011), 79-95.
- 高木 麻由美, 橋本 万里子 訳「アーサー王とゴーラゴン王」『立命館文學』 (617)(2010), 47-65
- 竹中 肇子 「Malory のアーサー王物語の誓い—「ペンテコステの誓い」から「偽誓」まで」『鶴見英語英米文学研究』 (11) (2010), 111-129
- 徳永 聡子, 松田 隆美, 高宮 利行 [他]「D. S. Brewer 旧蔵神話学コレクション展」解題目録 『慶應義塾大学日吉紀要, 英語英米文学』 (56)(2010), 27-47
- Fuwa, Yuri. "A 'Just War'? A Further Reassessment of the Alliterative *Morte Arthure*", in *War and*

Peace : Critical Issues in European Societies and Literature 800-1800 (Fundamentals of Medieval and Early Modern Culture 8) edited by Albrecht Classen and Nadia Margolis (Walter de Gruyter, 2011), 349-75.

Ⅲ. 2011 年度年次大会のお知らせ

[日時] 2011 年 12 月 17 日 (土) 12 時 45 分

[場所] 中央大学駿河台記念館 280 号室

[プログラム]

第一部 ブリストル大会報告

- ① 「『メリアドール』と「文化移転」の主題」 (報告者) 佐佐木 茂美
- ② 「“not semly” (SGGK, 348): *Sir Gawain and the Green Knight* における英雄像の〈転身譜〉」 (報告者) 河崎 征俊
- ③ 「*La figure du chasseur dans Guillaume d'Angleterre et les romans de Chrétien de Troyes*」 (報告者) 小沼 義雄

第二部 研究発表

- ① 「ウェールズ文学におけるゴーヴァン像—*Gwalchmai*」 (発表者) Natalia Petrovskaia
- ② 「*Saga af Tristram ok Ísodd* 再考」 (発表者) 林 邦彦

第三部 野口俊一先生追悼シンポジウム

「マロリーとその伝統」

「マロリーとピーター・ヘイリン—16 世紀のアーサー王物語受容の一断面」

(司会・講師) 高宮 利行

「故野口先生の仕事を辿る—マロリーのテクストに残された書き込みを読む」

(講師) 向井 毅

「*The Editor at Work: Joseph Haslewood's Edition of Malory (1816)*」 (講師) 不破 有理

「*MS HM 136 and Caxton's 1480 Edition: Possible Textual Development of the Chronicles of England*」 (講師) 高木 眞佐子

支部総会

[事務費] 1,000 円 (会員のみ/学生無料)

[懇親会] 18:00~

ポンヌフ (駿河台記念館 1F)

[懇親会費] 6,000 円 (学生 4,000 円)

Ⅳ. 会計からのお願い

会費納入のお願い

下記のとおり 2012 年度分会費の納入をお願い申し上げます。払込票は先般お送りした支部大会のお知らせに同封いたしました。寄付金についてもこちらの払込票をご利用ください。

〈郵便振替口座番号〉

加入者名: 国際アーサー王学会日本支部

口座番号: 00250-6-41865

年会費: 3,000 円

会 計: 多ヶ谷有子

寄付金報告とお願い

2011 年度には、以下の会員の方々から寄附をいただきました。心より感謝申し上げます。

原野昇様
篠田勝英様
高木眞佐子様
高橋勇様
高宮利行様
多ヶ谷有子

日本支部では、一口 1,000 円からの寄付金を随時募集いたしております。ご寄付を希望される方は、年会費払込票に「寄付〇口」とお書き添えの上、年会費とともにお支払い下さい。また大会会場でのご寄付も受け付けております。皆さまの温かいご支援をお願い申し上げます。

Ⅴ. 会員名簿に関するお願い

ご連絡先等の名簿記載事項に変更があった場合は、速やかに事務局までお知らせください。ただし実際に会員に配布される会員名簿に関し

ては、個人情報保護の観点からそれぞれの事項（所属・住所・電話／ファックス番号・メールアドレス）を掲載中止にすることも可能です。ご希望がございましたら事務局までお申し出ください。

なお、国際学会会誌の *Bibliographical Bulletin* については、名簿記載事項変更の届出が反映されるまでに一年かかります。悪しからずご了承ください。

VI. 研究発表・シンポジウム企画募集

日本支部では随時、支部大会での研究発表・シンポジウム企画を募集しております。ご希望・ご提案がございましたら事務局までお寄せください。シンポジウム企画は 7 月末、研究発表は 9 月末を締切のめどとし、時期に従って当該年度または次年度の大会に組み入れて参ります。

編集・発行

国際アーサー王学会日本支部事務局

〒108-8345 東京都港区三田 2-15-45

慶應義塾大学文学部 高橋勇研究室内

Tel: 03-5427-1054

Fax: 03-5427-1578

Email: isamut@flet.keio.ac.jp

メーリング・リスト

king-arthur@freeml.com

(新規登録・アドレス変更は事務局まで)

学会ウェブサイト

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/iasjp/>